

仙石山仏教学論集  
第10号（平成30年）

Sengokuyama Journal  
of Buddhist Studies  
Vol. X, 2018

灌頂撰『大般涅槃經玄義』における「體」について

山本泰照

# 灌頂撰『大般涅槃經玄義』における「體」について

山本 泰照

## 1. はじめに

章安大師灌頂（561-632）は一般的に天台大師智顛（538-597）の高弟として『法華玄義』や『摩訶止観』をはじめとする智顛の著作の整理及び修訂を行ったことで知られている。

そのため、灌頂の功績としては智顛著作の整理・編集と見られがちであるが、灌頂の活動を見ると注目すべきものとして大乘『涅槃經』の注釈書の執筆があり、その主たるものとして『大般涅槃經玄義』二卷（以下『涅槃經玄義』とする）と『大般涅槃經疏』三十三卷がある。

しかし、灌頂が修訂・整理を行った『法華玄義』などには、本文中に灌頂自身の考えが混入していることや、吉蔵の著作からの援用が認められていることが先行研究にて指摘されている。<sup>1</sup>

そのため、『涅槃經玄義』においても本文にて説示される内容のうち、どこまでが智顛の考えを承けたものでどこまでが灌頂独自の考えであるのか、あるいはまた、吉蔵などからの援用であるのか、考えなければならない問題がある。

本論で取り上げる『涅槃經玄義』は「玄義」と題名がつくように、智顛の『法華玄義』における解釈方法（名・體・宗・用・教の五重玄義）をそのまま用いて大乘『涅槃經』の解釈を行ったもので、本文を構成する五重玄義のうち、「名」について言及した部分と「教」について言及した部分は先行研究においてその内容はすでに精査されている。<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 平井（1984, 22-44）及び河村（1985, 218-225）を参照のこと。

<sup>2</sup> 大野（1974, 344-347）及び黄（2005, 685-687）及び林（2014, 37-40）を参照のこと。

以上の事を踏まえて、本論では『涅槃經玄義』における「體」に対する灌頂の考えを中心とし、灌頂の大乘『涅槃經』に対する理解の内容と智顛の著作との関係について検討を行うものである。

## 凡例

- ・書き下し文中の句読点は、意味が通じるよう筆者が施したものである。
- ・テキスト原文のうち『大正新脩大藏經』の欄外注記にしたがって改めた部分は、その都度本論の脚注において示した。

## 2. 灌頂の「體」の解釈

### 第1項 「不縦不横」「不並不別」「微妙祕密」と「體」

『涅槃經玄義』序文の結びの部分には五重玄義各章にて説示される部分の特徴となるべき語句に対する記述があり、その記述は次のようなものである。

總攬三法三目三點名大般涅槃。金剛寶藏満足無缺。不縦不横不並不別微妙祕密以當其體常住不變恒安清涼不老不死以當其宗。置毒佛性遍五味中味味殺人。震大毒鼓雖無心欲聞聞之皆死。八大自在我以當其用。常住二字無上醍醐與諸典別決定之吼以當其教。名含體攝常宗毒用極教之相也。<sup>3</sup>

(總じて三法三目三點を攬て大般涅槃と名づく。金剛寶藏は満足して缺けること無く、不縦不横、不並不別、微妙祕密を以て其の體に當て、常住不變、恒安清涼、不老不死を以て其の宗に當て、毒の佛性を置き五味の中に遍じて味味人を殺し、大毒鼓を震わせ聞かんと欲する心無しと雖も之を聞けば皆死す。八大自在の我を以て其の用に當る。常住の二字、無上の醍醐、諸典と別なる決定の吼を以て其の教に當る。名は體を含し、常宗、毒用を攝す。極教の相なり。)

<sup>3</sup> 『大正』 vol. 38, 1 b25-c1

その中で「體」のキーワードとして記されている語句は「不縱不横」「不並不別」「微妙祕密」の三つである。

この節では「體」の特徴となるこの三つの語句の解釈を『涅槃經玄義』の本文より窺い、『法華玄義』『摩訶止観』などの智顛説灌頂筆の文献の記述や『四教義』『維摩經文疏』といった智顛親撰の文献の記述と比較して灌頂の大乘『涅槃經』の受容並び理解を考察したい。

序文にある「體」の部分のキーワードであるが、本文中には次のような具体的記述がある。

釋其大義者。大有三義。一理大。二智大。三用大。釋論謂大多勝。大取包廣。多取含攝。勝取秀出。(中略)於一大字三法具足不縱不横不可思議。名祕密藏。祕密藏者即大涅槃。<sup>4</sup>

(其の大的義を釋さば、大に三義有り。一に理大、二に智大、三に用大なり。釋論に謂く、大多勝なり。大は包廣を取り、多は含攝を取り、勝は秀出を取る。(中略)一の大的字において三法具足し、不縱不横不可思議なるを祕密藏と名づく。祕密藏とは即ち大涅槃なり。)

釋般涅槃爲滅。滅有三義。謂性滅圓滅方便滅。(中略)如是三滅即三解脱。無縛無脫。是性淨解脱。因果畢竟。是圓淨解脱。巧順機宜無染無累。是方便淨解脱。於一滅字三脱具足不縱不横不可思議。故名三點。三點者即大涅槃。<sup>5</sup>

(般涅槃を釋して滅と爲す。滅に三義有り。性滅、圓滅、方便滅と謂うなり。(中略)是の如き三滅は即ち三解脱なり。縛無く脱無きは是れ性淨解脱。因果畢竟すれば是れ圓淨解脱。巧みに機宜に順じて染なく累なきは是れ方便淨解脱なり。一の滅の字において三脱具足し、不縱不横不可思議なり。故に三點と名づく。三點とは即ち大涅槃なり。)

<sup>4</sup> 『大正』 vol. 38, 3 a13-a19

<sup>5</sup> 『大正』 vol. 38, 3 a19-a28

釋槃那爲度。度有三義。謂實相究竟度。智究竟度。事究竟度。（中略）如此三度即三般若。實相般若是一切種智與諸佛同體。觀照般若即一切智與諸佛同意。文字般若即道種智與諸佛同事。於一度字三智具足不縱不橫不可思議。故名面上三目。三目者即大涅槃。<sup>6</sup>

（槃那を釋して度と爲す。度に三義有り。實相究竟度、智究竟度、事究竟度と謂うなり。（中略）此の如き三度は即ち三般若なり。實相般若は是れ一切種智、諸佛と同體なり。觀照般若は即ち一切智、諸佛と同意なり。文字般若は即ち道種智、諸佛と同事なり。一の度の字に於いて三智具足し、不縱不橫不可思議なり。故に面上の三目と名づく。三目とは即ち大涅槃なり。）

これらの記述では「大」「滅」「度」それぞれが三つの義を備えていることを説示して、それぞれの記述の中に「不縱不橫不可思議」の語が一回づつ用いられている。

また、三法三目三點の語は三法が「大」に、三點が「滅」に、三目が「度」の部分の結びとして用いられている。

これら三字と不縱不橫の関係については次のような記述がある。

三法具足名大般涅槃。三法即三智三智即三點。三法即九法九法即三法。三法即九法是不縱。九法即三法是不橫。不並不別亦復如是。不三而三不一而一所以名祕密藏。攝一切法悉入其中。是諸佛體。是諸佛師都名總號。乃爲具足稱大涅槃。意在此耳。一智三智三智一智。所以名一面三目。涅槃亦耳。一脫三脫三脫一脫。所以名爲伊字三點。涅槃亦爾。體意及事。不得相離不得相混。不可言言不可思思故名大涅槃。<sup>7</sup>

（三法具足するを大般涅槃と名づく。三法は即ち三智、三智は即ち三點なり。三法は即ち九法、九法は即ち三法なり。三法即ち九法は是れ不縱、九法即ち三法は是れ不橫、不並不別も亦た復た是の如し。三ならずして而も三、一ならずして而も一なる所以に祕密藏と名づけ、一切法を攝し悉く其の中に入る。是れ

<sup>6</sup> 『大正』 vol. 38, 3 a28-b12

<sup>7</sup> 『大正』 vol. 38, 3 b17-26

諸佛の體なり。是れを諸佛の師、都ての名の總號を乃ち具足すと爲し大涅槃と稱す。意此にあるのみ。一智にして三智、三智にして一智。所以に一面三目と名づく。涅槃も亦たしかるのみ。一脱は三脱、三脱は一脱なる所以に名づけて伊字三點と爲す。涅槃もまたしかなり。體意及び事は相離るることを得ず、相混ざる事を得ず。言をもて言うべからず、思をもて思うべからず。故に大涅槃と名づくなり。）

この部分で留意すべき点は大減度の三字と結びついている三法、三解脱、三智が全て大涅槃に総括されると共にこれらの数字が「三即一」「一即三」「三即九」「九即三」とあるように三と一、三と九とが相即するものとして考えられ、不縦不横と不並不別として結び付けられている点と、ここで説示された涅槃の體と意が相離れず相混ざらず、大涅槃の概念が言葉や思いで表現することが出来ないものとされている点である。

この部分で説示される語句や数字の相即について智顛の著作中より見ると次のような表現がある。

数字と相即について言及したものでは

法華但詮一心三諦。涅槃備詮三諦。<sup>8</sup>

（法華はただ詮ずれば一心三諦。涅槃は備さに詮ずれば三諦なり。）（『四教義』）

一諦即三諦。三諦即一諦。是名境本。<sup>9</sup>

（一諦は即ち三諦にして、三諦は即ち一諦なり。是れを境の本と名づく。）（『法華玄義』）

云何圓信。信一切法即空即假即中。無一二三而一二三。無一二三是遮一二三。而一二三是照一二三。無遮無照皆究竟清淨自在。<sup>10</sup>

（云何が圓信なりや。一切法は即空即假即中を信ずることなり。一二三無くし

<sup>8</sup> 『大正』 vol. 46, 728 a17-a28

<sup>9</sup> 『大正』 vol. 33, 777 c6-c7

<sup>10</sup> 『大正』 vol. 46, 2 a14-a17

て而も一二三なり。一二三無きは是れ一二三を遮す。而も一二三は是れ一二三を照らす。遮すること無く照らすことなく、皆究竟清淨自在なり。）（『摩訶止観』）

がある。

智顛親撰の『四教義』と『法華玄義』の数字の相即性はほぼ一致し、先に挙げた『涅槃經玄義』の三法、三解脱、三智の数字の相即性も「一即三」「三即一」と論理も共通のものとなっている。

また、『涅槃經玄義』の「三ならずして而も三……」部分も『摩訶止観』の記述と類似している。

このような語句の用法上の特徴から数字の相即性については智顛の理論を踏襲したものと考えられる。

不縦不横や秘密蔵といった語句については智顛の著作を見ると次のような記述がある。

果圓者。妙覺不思議。三徳之果不縦不横也。<sup>11</sup>  
（果圓とは妙覺不思議、三徳の果は不縦不横なり。）（『四教義』）

此即三徳不縦不横。究竟後心大涅槃也<sup>12</sup>  
（此れ即ち三徳は不縦不横、究竟後心の大涅槃なり）（『法華玄義』）

即三道是三徳。性得因時不縦不横。名三佛性。修得果時不縦不横。如世伊字<sup>13</sup>  
（即ち三道は是れ三徳。性の因を得る時の不縦不横を三佛性と名づけ、修の果を得る時の不縦不横は世の伊字の如し。）（『摩訶止観』）

『四教義』における記述には大乘『涅槃經』という具体的な経題は出て

<sup>11</sup> 『大正』 vol. 46, 772 b26-b27

<sup>12</sup> 『大正』 vol. 33, 734 c14

<sup>13</sup> 『大正』 vol. 46, 126 c20-c21

いないものの、圓という語が出ていることから円教、即ち法華涅槃時たる大乘『涅槃經』を含めて記述されたものと考えられ、『法華玄義』においては三徳と不縦不横が結びつけられている。

『摩訶止観』については伊字の語が見えるため大乘『涅槃經』を念頭にした記述といえよう。

従って、上に挙げたものは全て三徳と不縦不横が結びつけられていることが説示されており、不縦不横と三徳、涅槃の関係も数の関係性と同様に智顛の考えを踏襲したものと考えられることができる。

次に秘密蔵に対する記述であるが

二住三徳涅槃名之爲住者。一法身。二般若。三解脱。此三不縦不横。如世伊字名秘密蔵眞實心發即是法身。<sup>14</sup>

(二に三徳涅槃に住するを之名づけて住と爲すは、一に法身、二に般若、三に解脱なり。此の三は不縦不横にして世の伊字の如く秘密蔵と名づけ、眞實の心を發するは即ち是れ法身なり。)(『四教義』)

如是觀者。三道不異三徳。三徳不異三道。亦於三道具一切佛法。何者。三道即三徳。三徳是大涅槃。名秘密蔵。<sup>15</sup>

(是の如き觀とは、三道は三徳に異ならずして三徳は三道に異ならず。亦た三道に於いて一切の佛法を具す。何となれば、三道は即ち三徳。三徳は是れ大涅槃にして秘密蔵と名づければなり。)(『法華玄義』)

とあり、これらの記述も『涅槃經玄義』にて説示される涅槃と秘密蔵の関係とほぼ同じものであるため、この部分も智顛のものを踏襲したと言えよう。

<sup>14</sup>『大正』 vol. 46, 763 a14-a16

<sup>15</sup>『大正』 vol. 33, 711 b23-b25

## 第2項 「體」の五種

先の部分までは序文における記述を中心に體に対する考察を進めてきたが、『涅槃經玄義』には『法華玄義』と同様に體に対して具体的に言及した項目がある。

この部分では、體について、どのような事が述べられているのであろうか。

この部分では、智顛や灌頂以前に説示された大乘『涅槃經』の注釈書において示された見解に対して反論する形で論が進められ、灌頂は次のように涅槃の體について分類している。

強作五種言之。一約性淨涅槃。二約法身徳。三約一諦。四約不生不生。五約正性。初論性淨。總指一部。次論法身指哀歎。次論一諦指聖行。次論不生指徳王。次論正性。指師子吼迦葉等。不可備引。斑駁略周耳<sup>16</sup>

（強いて言わば五種と作して之を言う。一に性淨涅槃に約し、二に法身の徳に約し、三に一諦に約し、四に不生不生に約し、五に正性に約す。初めに性淨を論ずれば總じて一部を指す。次に法身を論ずれば哀歎を指す。次に一諦を論ずれば聖行を指す。次に不生を論ずれば徳王を指す。次に正性を論ずれば師子吼迦葉等を指す。備さに引くべからず。斑駁して略を周るのみ。）

このように、灌頂は涅槃の體を五種類に分類した上で、それぞれの項目に対応する『涅槃經』の部分の説示している。

この項目に於いて五種類の語のうち先に出た法身や智顛著作中に頻出する一諦以外の言葉が智顛の著作中に用いられているかという点であるが、『四教義』に

六善修道品者。觀十法界五陰生死。即是法性五陰。法性五陰。即是性

<sup>16</sup>『大正』 vol. 38, 8 b6-b10

淨涅槃。即是四念處破八倒。知涅槃即生死<sup>17</sup>

(六に善の道品を修ずるとは、十法界を觀ず。五陰生死即ち是れ法性五陰、法性五陰即ち是れ性淨涅槃にして即ちこれ四念處の八倒を破し、涅槃即生死を知るなり。)

此最後究竟涅槃。名爲不生不生<sup>18</sup>

(此れ最後の究竟涅槃にして、名づけて不生不生と爲す。)

とあり、五つのうち二つ（性淨涅槃、不生不生）は智顛親撰の文献にも用いられている語であったと言えることから、語句に限定すれば灌頂は智顛が用いた単語を『涅槃經玄義』でそのまま用いたと言うことが可能であろう。<sup>19</sup>

### 1) 性淨涅槃について

涅槃の體を示すこれら五つの語句の概念と智顛の文献における概念であるが、始めに示されている性淨涅槃の語について灌頂は

性淨者。淨有三種。一方便淨。二圓淨。三性淨。<sup>20</sup>

(性淨とは、淨に三種有り。一に方便淨、二に圓淨、三に性淨なり。)

と述べて、涅槃に三種類の性質があることを示している。

始めに挙げられた方便淨は

方便淨者。嘔和善巧權能逗物。住首楞嚴。建于大義。或一閻浮提。或一四天下。或一大千界。或十方土。隨諸衆生應可調伏種種示現。無生而生。王宮七步。無滅而滅。倚臥雙林。(中略)乃至下者作九法界身。非生現生。非滅現滅。不前不後。一時等現。然於寂滅。無所損滅。於

<sup>17</sup> 『大正』 vol. 46, 762 a17-a19

<sup>18</sup> 『大正』 vol. 46, 764 b9-b10

<sup>19</sup> 正性の語は智顛親撰の文献からは用法例が見られなかった。

<sup>20</sup> 『大正』 vol. 38, 8 b10-b11

諸生死。無染無累。故名方便淨涅槃也<sup>21</sup>

（方便淨とは、嘔和善巧、權能く物に逗じ、首楞嚴に住して大義を建つ。或いは一閻浮提、或いは一四天下、或いは一大千界。或いは十方土、諸の衆生の應さに調伏すべきに随って種種に示現し、無生にして生じて王宮に七歩し、滅無くして滅し、雙林に倚臥す。（中略）乃至、下は九法界に身を作して非生にして生を現じ、非滅にして滅を現す。不前不後、一時に等しく現ず。然れば寂滅に於いて損滅する所無く、諸の生死に於いて染無く累無し。故に方便淨涅槃と名づくるなり。）

とあって、灌頂は釈尊の生誕ならびに涅槃が「非生現生」「非滅現滅」であるとして釈尊の肉体の生死を方便と結び付けて「方便淨涅槃」の定義としている。

上記の記述に関連する智顛の文献での記述の有無であるが、方便淨の語は

薪盡火滅爲方便淨涅槃。此文便若將修因所成。爲方便涅槃者。以薪盡火滅爲何等涅槃。故知應有三涅槃。三涅槃即是三軌。<sup>22</sup>（『法華玄義』）  
（薪盡火滅を方便淨涅槃と爲す。此の文は便ち、將に修因所成の若し。方便涅槃を爲すとは、薪盡火滅を以て何等の涅槃を爲すや。故に知りぬ、三涅槃有りと。三涅槃は即ち是れ三軌なり。）

方便淨解脱調伏衆生不爲所染。故名爲脱<sup>23</sup>

（方便淨解脱は衆生を調伏し、染まる所と爲さず。故に名づけて脱と爲す）  
（『摩訶止観』）

とあり、『四教義』には方便淨の語は見られないものの

---

<sup>21</sup> 『大正』 vol. 38, 8 b11-b22

<sup>22</sup> 『大正』 vol. 33, 745 b28-c2

<sup>23</sup> 『大正』 vol. 46, 16 a2-a3

八入涅槃相者。雙樹入無餘涅槃。如薪盡火滅。<sup>24</sup>

（八に入涅槃相とは、雙樹にて無餘涅槃に入るなり。薪盡火滅の如し。）

とあって、入涅槃の概念は三書とも薪盡火滅の語が用いられていることや衆生調伏に関する記述も類似していることから、概念は概ね共通するものと言える。

しかし、「方便淨涅槃」の語句と具体的な記述は、『法華玄義』『摩訶止観』といった智顛述灌頂筆の文献や『涅槃經玄義』以降の文献に見える語句であるため、この部分は智顛の著作に倣ったものと考えられる。

次に圓淨についての記述であるが、灌頂は次のように述べている。

圓淨者。因圓果滿。畢竟成就。原其初基。以大涅槃心。行如來行。持戒不殺。擁護正法。廣宣流布。利益衆生。迴向大乘。感得金剛堅固之體。法身常身圓滿具足。獲大涅槃。修道得故。安住於此祕密藏中。復能頌宣廣說。一切悉有佛性。施與一切。常命色力安無礙辯。雖破煩惱亦無所破。雖圓智慧。亦無能圓。雖施衆生。不得衆生及以施相。是名圓淨涅槃也。<sup>25</sup>

（圓淨とは因圓かに果滿じ、畢竟して成就す。其の初基を原ぬれば大涅槃の心を以て如來の行を行じ、戒を持って殺さず、正法を擁護して廣宣流布し、衆生を利益して大乘に迴向し、金剛堅固の體を感得して法身常身圓滿具足し大涅槃を獲る。道を修して得るが故に此の祕密藏の中に安住し、復た能く頌宣し廣説す。一切に悉く佛性有り。一切の常、命、色、力、安、無礙、辯を施與す。煩惱を破すと雖も亦た破する所無し。圓の智慧と雖も亦た能く圓かにするもの無し。衆生に施すと雖も衆生及び施の相を以て得ず。是を圓淨涅槃と名づくるなり。）

灌頂は圓淨を圓の因に対する滿の果という関係性の元で果が成就したものの根源を大涅槃の心に基づく如來の行と定義し、法身常身圓滿具足の

<sup>24</sup>『大正』 vol. 46, 751 a25-a26

<sup>25</sup>『大正』 vol. 38, 8 b22-c1

で大涅槃を得るといふ旨を述べ、また、圓淨の性質を灌頂は「煩惱を破すと雖も亦た破する所無し」と述べて圓淨涅槃の定義としている。

この部分に関連する智顛の文献の記述であるが『法華玄義』では

修因所成爲圓淨涅槃<sup>26</sup>

(因を修して成ずる所を圓淨涅槃と爲す)

とその性質が述べられており、『四教義』では

因圓者。雙照二諦自然流入也。果圓者。妙覺不思議。三徳之果不縦不横也。<sup>27</sup>

(因圓とは雙べて二諦を照らし、自然に流入するなり。果圓とは妙覺不思議、三徳の果不縦不横なり。)

七妙覺地者。金剛後心朗然大覺。妙智窮源無明習盡。名眞解脫。肅然無累寂而常照。名妙覺地。常住佛果具足一切佛法。名菩提果。四徳涅槃名爲果果<sup>28</sup>

(七に妙覺地とは、金剛の後の心は朗然とし、大覺の妙智は窮り無明の源を習盡するを眞解脫と名づけ、肅然として累無く寂として而も常に照らすを妙覺地と名づく。佛果は常住にして一切の佛法を具足し菩提果と名づけ、四徳涅槃を名づけて果果と爲す。)

とある。

『法華玄義』では圓淨涅槃が因を修した結果によるものとされ、『四教義』では、果圓の境地が妙覺で涅槃三徳の不縦不横の性質と結び付けられていることが説示されており、また妙覺地の佛果が常住であるとされている。

---

<sup>26</sup>『大正』 vol. 33, 745 b27-28

<sup>27</sup>『大正』 vol. 46, 722 b26-b27

<sup>28</sup>『大正』 vol. 46, 759 c17-c20

『涅槃經玄義』では因圓に対するものが果満でその究極的な結果として法身常身の圓満具足と大涅槃の成就ということが説示されており、これらの記述は『法華玄義』並びに『四教義』の記述と類似していることから、灌頂は圓淨の概念について、智顛の記述を活用したものと考えられよう。

しかし、圓淨の語については『法華玄義』並びに『摩訶止観』<sup>29</sup>にあるのみで『四教義』には見られないことから、圓淨の語も灌頂独自のものがある可能性が考えられる。

次に性淨涅槃に関する記述であるが、灌頂は

性淨者。非修非得。非作業非與業。本自有之。非適今也。沖湛寂靜。不生不滅。雖在波濁。波濁不能昏動。猶如仰觀虛空月形。五翳不能翳。雖復隨流苦酢其味真正。停留在山。雖沒膚中。膿血之所不染。故名性淨涅槃也。<sup>30</sup>

(性淨とは、修するに非ず得るに非ず。業を作すに非ずして業を與うるに非ず、本自り之有り。今に適いたるに非ず。沖湛寂靜にして不生不滅、波濁在りと雖も波濁は昏動すること能わず。なお仰いで虚空の月の形を觀るに五翳の翳すること能わずが如し。復た流れに随うと雖も其の味は苦酢にして真正なり。停留して山に在り、膚中に没すると雖も膿血の染まらざる所、故に性淨涅槃と名づくるなり。)

と述べて性淨の概念を「本自り之有り」として、非修非得や非作業非與業、不生不滅といった言葉でその性質を説示している。

性淨の語に関する智顛の著作の記述であるが、『法華玄義』には

即空故方便淨。即假故圓淨。即中故性淨。<sup>31</sup>

(即空の故に方便淨、即假の故に圓淨、即中の故に性淨なり)

<sup>29</sup> 『大正』 vol. 46, 127 a5-a6 を参照のこと。

<sup>30</sup> 『大正』 vol. 38, 8 c1-c6

<sup>31</sup> 『大正』 vol. 33, 789 c13-c14

謂如來藏性淨涅槃。常清淨不變。<sup>32</sup>

（謂く、如來藏とは性淨涅槃にして常に清淨不變なり。）

とあって、性淨涅槃は三諦のうちの中道と如來藏と定義されている。

この2つの語の関係について『四教義』では

如來非道能斷煩惱。非可修法常住不變。是爲實諦。<sup>33</sup>

（如來は道に非ずして能く煩惱を斷じ、法は修すべきに非ずして常住不變なり。

是れを實諦と爲す。）

一實諦論此四諦者。即是無作四實諦也。（中略）即是一實諦。名爲無作四實諦也。若聞此信解無礙者。即信一切衆生即是不思議解脫也。即是大乘即是般若。即是首楞嚴定。即是佛性。即是法身。即是實相。即是中道第一義諦。即是如來藏。即是法界。即是畢竟空。即是一切佛法。<sup>34</sup>

（一實諦を論ぜば此の四諦とは即ち是れ無作の四實諦なり。（中略）即ち是れ一實諦、名づけて無作の四實諦と爲すなり。若し此れを聞いて信解し無礙なる者は即ち一切衆生は即ち是れ不思議解脫と信ずるなり。即ち是れ大乘にして即ち是れ般若、即ち是れ首楞嚴定にして即ち是れ佛性、即ち是れ法身にして即ち是れ實相、即ち是れ中道第一義諦、即ち是れ如來藏、即ち是れ法界、即ち是れ畢竟空にして、即ち是れ一切の佛法なり。）

と述べている。

『四教義』の記述に基づけば、實諦は常住不變であり、如來藏と中道第一義諦とは相即の関係であると言える。

---

<sup>32</sup>『大正』 vol. 33, 803 a4-a5

<sup>33</sup>『大正』 vol. 46, 755 b24-b25

<sup>34</sup>『大正』 vol. 46, 761 b23-c3

本文中の「即是首楞嚴」は「即是首楞嚴定」、「即佛性」は「即是佛性」と脚注に有り、引用文中ではこれを改めた。

『涅槃經玄義』で述べるところの性淨涅槃の性質は、不生不滅といった不変性や膿血之所不染と表現される清浄性であり、『法華玄義』や『四教義』の記述を総括すれば、性淨涅槃の性質は中道第一義諦と同質のものであることから、不変性や清浄性を保持するものといえよう。

従って、性淨涅槃の概念は『四教義』や『法華玄義』における記述を結合すると成立することから、灌頂は智顛の考えのピースをまとめ上げる形で性淨涅槃の概念を打ち立てたと考えられるのである。

また、方便淨、圓淨、性淨の関係性について灌頂は

此三涅槃。不可相離。即三而一。不可相混。即一而三。雖復一三。即非一三。雖非一三。而復一三。<sup>35</sup>

(此の三涅槃は相離れるべからず。即ち三にして而も一、相混ざるべからず。即ち一にして而も三、復た一三と雖も即ち一三に非ず。一三に非ずと雖も而も復た一三なり。)

と述べてそれぞれに相即性があると説示し、三者の働きについては

總唱涅槃。即是其名。專據性淨。以當其體。指於圓淨。即是其宗。方便善巧。以爲其用。作此分別。即是其教。雖復分別。都是一法。所謂大乘。大般涅槃。<sup>36</sup>

(總じて涅槃と唱うるは、即ち是れ其の名にして専ら性淨に據り以て其の體に當つ。圓淨を指すは即ち是れ其の宗。方便善巧を以て其の用と爲す。此の分別を作すは即ち其の教なり。復た分別すると雖もすべては是れ一法、所謂大乘、大般涅槃なり。)

と述べてそれぞれを五重玄義に当てはめて解釈し、大涅槃の一法に総括されるものとして三者の解説をまとめている。

<sup>35</sup>『大正』 vol. 38, 8 c6-c7

<sup>36</sup>『大正』 vol. 38, 8 c10-c13

## 2) 涅槃三徳について

## ・法身の徳について

五種類のうち二番目に説示される法身の徳についてであるが、灌頂は

二約法身徳者。徳有三種。一法身徳。二般若徳。三解脱徳。<sup>37</sup>  
 (二に法身に約すとは、三種の徳有り。一に法身の徳、二に般若の徳、三に解脱の徳なり。)

と述べて法身を視点とした三徳の解説へと筆を進める。

それぞれの解説であるが、法身の徳については

法身者。即是金剛堅固之體。非色即色。非色非非色。而名爲眞善妙色。眞故非色。善故即色。妙故非色非非色。又眞即是空。善即是假。妙即是中。例一切法。亦復如是。以是義故。名爲佛法名佛法界。攝一切法。名法身藏。名法身徳也。<sup>38</sup>

(法身とは、即ち是れ金剛堅固の體なり。色に非ずして即ち色。非色にして非色に非ず。而も名づけて眞善妙色と爲す。眞の故に非色なり。善の故に色に即し、妙の故に非色にして非色に非ず。また眞は即ち是れ空、善は即ち是れ假、妙は即ち是れ中なり。一切法を例せば亦た復た是の如し。是の義を以ての故に名づけて佛法と爲し、佛法界と名づく。一切法を攝するを法身藏と名づけ、法身の徳と名づくるなり。)

と述べて法身の徳の性質を眞善妙色と表し、この字句の中に空・假・中の三諦が含まれることを説示した上で、これを佛法界または一切法を攝するものとしている。

この記述に関連する智顛の文献の記述であるが、『法華玄義』に

<sup>37</sup>『大正』 vol. 38, 8 c14-c15

<sup>38</sup>『大正』 vol. 38, 8 c16-c21

亦是眞善妙色。何者。生死即空故名眞。生死即假故名善。生死即中故名妙。<sup>39</sup>

（亦た是の眞善妙色とは何者ぞ。生死即ち空なる故に眞と名づけ、生死即ち假なる故に善と名づけ、生死即ち中なる故に妙と名づくるなり。）

という記述があり、『涅槃經玄義』に於ける眞善妙色の概念とはほぼ同等のことが述べられている。

また三諦やその他の語に関する記述については『法華玄義』に

九法界即佛法界名位高。十法界即空即假即中名用長。即一而論三即三而論一。<sup>40</sup>

（九法界は即ち佛法界にして位高と名づく。十法界は即空、即假、即中なるを名づけて用長とす。即一を論ぜば三、即三を論ぜば一なり。）（『法華玄義』）

とあって、九法界が即ち佛法界で十法界が即空即假即中であることが説示されており、『四教義』においては

理圓者。中道即一切法理不偏也。<sup>41</sup>

（理の圓とは、中道即一切法にして理は不偏なり。）（『四教義』）

一實諦論此四諦者。即是無作四實諦也。（中略）即是一實諦。名爲無作四實諦也。若聞此信解無礙者。即信一切衆生即是不思議解脱也。即是大乘即是般若。即是首楞嚴。即佛性。即是法身。即是實相。即是中道第一義諦。即是如來藏。即是法界。即是畢竟空。即是一切佛法。<sup>42</sup>  
（一實諦を論ぜば此の四諦とは即ち是れ無作の四實諦なり。（中略）即ち是の一實諦を名づけて無作の四實諦と爲すなり。若し此れを聞いて信解し無礙なる者

<sup>39</sup>『大正』 vol. 33, 789 c22-c24

<sup>40</sup>『大正』 vol. 33, 692 c11-c13

<sup>41</sup>『大正』 vol. 46, 722 b21-b22

<sup>42</sup>『大正』 vol. 46, 761 b22-c3

は即ち一切衆生は即ち是れ不思議解脱と信ずるなり。即ち是れ大乘にして即ち是れ般若、即ち是れ首楞嚴にして即ち佛性、即ち是れ法身にして即ち是れ實相、即ち是れ中道第一義諦、即ち是れ如來藏、即ち是れ法界、即ち是れ畢竟空にして。即ち是れ一切の佛法なり。）

とあって、中道が一切法であることと、法身から一切の仏法までの関係がそれぞれ相即していることが説示されている。

『涅槃經玄義』における法身の徳の概念は『四教義』や『法華玄義』に説示されたことが根底にあり、この部分で現れる語句も両書に見られることから、灌頂は智顛の考えを集約してこの項目の理論を展開したと考えられよう。

#### ・般若の徳について

次に般若の徳に関する記述であるが、

般若徳者。即是無上調御。一切種智。名大涅槃。明淨之鏡。此鏡一照一切照。照中故是鏡。照眞故是淨。照俗故是明。明故則像亮假顯。淨故瑕盡眞顯。鏡故體圓中顯。三智一心中得故。言明淨鏡。攝一切法。故稱調御。是佛智藏。名般若徳也。<sup>43</sup>

（般若の徳とは即ち是れ無上調御、一切種智を大涅槃、明淨の鏡と名づく。此の鏡は一を照らして一切を照す。中を照らす故に是れを鏡とし、眞を照らす故に是を淨とし、俗を照らす故に是れを明とす。明の故に則ち像亮かに假顯れ、淨の故に瑕盡きて眞顯われ、鏡の故に體圓かに中顯われる。三智一心の中を得るが故に明淨の鏡と言う。一切法を攝ずるが故に調御と稱し、是れを佛智藏、般若の徳と名づくるなり。）

とあり、般若の徳を明淨の鏡に喩えて、中と眞俗の関係を三智一心のもとで表現して中が現れる行程を述べている。

<sup>43</sup>『大正』 vol. 38, 8 c21-c26

これらの表現と智顛の文献の関係であるが、『法華玄義』に

唯佛與佛乃能究盡。如此知見即是眼智。眼即五眼具足。智即三智一心。  
一切種智知於實。<sup>44</sup>

（唯だ佛と佛のみ能く究盡す。此の知見は即ち是れ眼智なり。眼は即ち五眼を具足し智は即ち三智一心。一切種智は實を知る。）

とあって佛智と三智一心について説示されており、『摩訶止観』では

理即者。一念心即如来藏理。如故即空。藏故即假。理故即中。三智一心  
心中具不可思議。<sup>45</sup>

（理即とは、一念の心は即ち如来藏の理なり。如の故に即ち空、藏の故に即ち假、理の故に即ち中なり。三智一心の中に不可思議を具す。）

とあり、『四教義』には

理圓者。中道即一切法理不偏也。智圓者。一切種智圓也<sup>46</sup>

（理圓とは中道即ち一切法、理は不偏なり。智圓とは一切種智の圓なり。）

三智一心と空仮中三諦の関係、中道並びに一切種智が圓に属することが説示されている。

また、鏡に関する表現であるが

仁王般若云。説智及智處皆名爲般若。譬鏡面互相照。<sup>47</sup>

（仁王般若に云く、智及び智處を説くを皆名づけて般若と爲す。鏡面が互いに相照らすに譬う。）

---

<sup>44</sup>『大正』 vol. 33, 710 a19-a21

<sup>45</sup>『大正』 vol. 46, 10 a15-a17

<sup>46</sup>『大正』 vol. 46, 722 b21-b22

<sup>47</sup>『大正』 vol. 33, 709 a29-b1

というものがある。

鏡の表現を除けば灌頂が説示する般若の徳の概念と、智顛の著作中に説示される一切種智や三智一心と圓並びに中道の概念は類似していると言える。

しかし、概念は類似しているが『涅槃經玄義』の般若の徳を示す「明淨之鏡」の喩えに類似する表現は智顛著作中には見られない。

中道や一切種智、圓などの語及び概念は智顛のものと同様と見られるが、表現方法については灌頂独自の表現である可能性も考えられよう。

・解脱の徳について

次に解脱の徳に対する記述であるが、灌頂は

解脱徳者。即是如來自在解脱。其性廣博無縛無脱。是廣博義。體縛即脱。是遠離義。調伏衆生。は無創疣義。如是解脱。攝一切法。亦名解脱藏。亦名解脱徳。<sup>48</sup>

（解脱の徳とは、即ち是れ如來の自在の解脱なり。其の性は廣博にして縛無く脱無しは是れ廣博の義、體は縛するに即ち脱なるは是れ遠離の義。衆生調伏は是れ創疣無き義なり。是の如き解脱は一切法を攝して亦た解脱藏と名づけ、亦た解脱の徳と名づく。）

と述べて、解脱の徳を如來の自在解脱としてその性質は「廣博にして縛無く脱無し」「是の廣博の義、體は縛にして即ち脱なるは」と説示して解脱が一切法を攝するものと説示している。

この部分について智顛の著作の記述を見てみると『摩訶止観』に

陰界入空寂無縛無脱。是名般若。<sup>49</sup>

（陰、界、入は空寂にして縛無く脱なし。是れを般若と名づく。）

<sup>48</sup>『大正』 vol. 38, 8 c26-c29

<sup>49</sup>『大正』 vol. 46, 16 a5-a6

方便淨解脫調伏衆生不爲所染。故名爲脫。<sup>50</sup>

（方便淨解脫は衆生を調伏して染まる所を爲さず。故に名づけて脱と爲す。）

三徳圓滿究竟般若。妙極法身。自在解脫。過茶無字可説也。<sup>51</sup>

（三徳圓滿究竟の般若は妙極法身、自在の解脫。茶を過ぎて字無きを説くべきなり。）

とあり、『法華玄義』には

大經三徳共成大涅槃。（中略）彼經明解脫徳。此經明數數示現現生現滅。隨所調伏衆生之處自既無累令他解脫<sup>52</sup>

（大經の三徳は共に大涅槃を成ず。（中略）彼の經は解脫の徳を明かす。此の經は數數示現して生を現じ、滅を現ざるを明かしては衆生の調伏する所の處に自ら既に累無く他を解脫せしむ。）

とあって、大乘『涅槃經』に解脫の徳が説示されていると共に『涅槃經玄義』の中にも「衆生の調伏」という語が用いられている。

『涅槃經玄義』解脫の徳の部分にある定義や語句は『法華玄義』『摩訶止観』に於いても用いられおり、説示される内容もほぼ同じものと言える。

このことから、解脫の徳の定義については『法華玄義』『摩訶止観』にて説示された語句や定義を踏襲する形で灌頂は『涅槃經玄義』で記述したと考えられよう。

灌頂はこれらの三つの徳の定義を説示したが、さらに三者の関係性を二つの観点から述べて三徳の義を総括している。

一つ目の部分の記述であるが

如是三徳。不可相離。文云。法身亦非。乃至解脫亦非如是三徳不可相

<sup>50</sup> 『大正』 vol. 46, 21 a2-a3

<sup>51</sup> 『大正』 vol. 46, 129 a4-a5

<sup>52</sup> 『大正』 vol. 33, 745 c23-746 a1

混。文云。三點具足。無有缺減。當知雖一而三。雖三而一。雖復三一。而非三一。雖非三一。而三而一。不可思議。攝一切法。攝一切人。<sup>53</sup>（是の如き三徳は相離れるべからず。文に云く、法身にも亦た非ず、乃至解脱にも亦た非ず。是の如き三徳は相混ざるべからず。文に云く、三點具足して缺減有ること無し。當に知るべし、一と雖も三、三と雖も一なり。復た三と雖も一にしてしかも三一に非ず。三一に非ずと雖も而も三にして一なり。不可思議にして、一切の法を攝し、一切の人を攝す。）

とあって、先述の方便淨を初めとする三の淨の概念と同じように、法身の徳が三にして一、一にして三という論理に基づいて相即することを説示している。

また、二つ目の項目は

今欲分別令易解故總唱祕藏。以當其名。法身攝一切法。不縱不横。以當其體。般若攝一切法。如一面三目。以當其宗。解脱攝一切法。如三點伊。以當其用。如此敷演。即是其教。非但經體義明。餘義亦顯。云云。<sup>54</sup>

（今、分別して解し易からしめんと欲する故に總じて祕藏と唱うるを以て其の名を當つ。法身は一切法を攝し、不縱不横を以て其の體に當つ。般若は一切法を攝し、一面三目の如きを以て其の宗に當つ。解脱は一切法を攝し、三點の伊の如きを以て其の用に當つ。此の如く敷演するは即ち是れ其の教なり。但だ經の體の義を明かすに非ず。餘の義も亦た顯す、云云。）

とあり、これも先の解脱淨等の項目と同様に、法身の徳に表される三つの義を五重玄義に当てはめて説示し、不縱不横や伊字三点等の大乘『涅槃經』にある語句を法身の徳に当てはめて灌頂は述べているのである。

相即における数の論理や不縱不横などの語句は、先述の通り智顛の著作

<sup>53</sup> 『大正』 vol. 38, 8 c29-9 a4

<sup>54</sup> 『大正』 vol. 38, 9 a6-a11

にも用いられているものであることから、この部分は智顛の表現に倣ったものと考えてよいだろう。

### 3) 一諦について

次に五種類のうちの三番目となる「一諦」についてであるが、本文中の記述は次のようにある。

三約一諦者。世人解諦。或境或智或教非無此義。今用理釋諦。理當即境正。境正即智教皆正。以理釋諦其義爲允。有四種四諦。<sup>55</sup>

(三に一諦に約すとは、世人が諦を解すに或いは境、或いは智、或いは教、此の義無きに非ずば、今は理を用いて諦を釋す。理當れば即ち境正し、境正しければ即ち智、教も皆正し。理を以て諦を釋さば其の義は允なりと爲す。四種の四諦有り。)

この部分で灌頂は、諦の解釈方法として理を用いており、理の正当性が証明されることによって、その他の境や智も同時に正当であることが証明されると述べると同時に、四諦に四種類存在することを述べている。

続いて灌頂は四種の四諦について、始めに

一生滅四諦。集是能生。苦是所生。能生生所生。所生還生能生。苦集迴轉。生死無已。道名能壞。滅是所壞。所壞亦壞能壞。能壞亦壞所壞。更互生滅。故稱生滅四諦。若論其相。逼迫生長能除所除等是也。如經。<sup>56</sup>

(一に生滅の四諦とは、集は是れ能生、苦は是れ所生。能生は所生を生じ、所生は還て能生を生じて苦集は迴轉し、生死已むこと無し。道を能壞、滅は是れ所壞と名づく。所壞は亦た能壞を壞し、能壞は亦た所壞を壞して更に互いに生滅す。故に生滅の四諦と稱す。若し其の相を論ざば、逼迫、生長、能除、所除

<sup>55</sup> 『大正』 vol. 38, 9 a11-a14

<sup>56</sup> 『大正』 vol. 38, 9 a14-a18

等是れなり。經の如し。）

と述べて、苦集滅道のそれぞれが能生と所生及び能壞と所壞にあたる関係であることを説示している。

この部分に関連する智顛の著作中の記述を見ると『四教義』に

行人一期果報。即是屬愛之果。具有三苦故名爲苦。苦理審實不虛名之爲諦。若於此苦果。無明不了愛著此果。起諸惡業。能招聚三途劇苦之報。又愛著此果起諸善業。能招聚修羅人天生死之報。此二結業。能招六道二十五有生死苦報。通名爲集。集理審實不虛名之爲諦。若能觀此報身。修戒定慧四念處三十七品。通至涅槃名之爲道。道理審實名之爲諦。屬愛煩惱善不善業。三界二十五有因滅名子縛滅。捨此報身。永更不受三界二十五有苦果。名果縛滅。<sup>57</sup>

（行人の一期の果報は即ち是れ愛の果に屬し、具に三の苦が有るが故に名づけて苦と爲し、苦の理は實を審らかにして虚しからずを名づけて之を諦と爲す。若し此の苦果に於いて無明を了せず此の果に愛着して諸の惡業を起こすは、能く三途に聚まる劇苦の報を招くなり。又、愛著の此の果は諸の善業を起こすは、能く修羅、人、天の生死の報に聚まるを招く。此の二の業を結んで能く六道二十五有の生死の苦の報を招くを通じるを名づけて集と爲し、集の理は實を審らかにして虚しからずを名づけて之を諦と爲す。若し能く此の報身を觀ざば、戒定慧、四念處の三十七品を修し、通じて涅槃に至るを名づけて之を道と爲し、道の理は實を審らかにするを名づけて諦と爲す。愛、煩惱、善不善の業に屬す三界二十五有の因の子縛を滅するを滅と名づけ、此の報身を捨て永くは更めて三界二十五有の苦果を受けずを果縛の滅と名づく。）

とある。

この記述では愛著に端を發する苦と惡業並びに六道二十五有の生死の苦と集は、道となる戒定慧、四念處の三十七品を修することによって滅する

<sup>57</sup>『大正』 vol. 46, 733 a2-a12

という旨を述べている。

『涅槃經玄義』の記述は簡略化されているが、主旨は同じであることから、生滅の四諦の概念は智顛のものを踏襲したものと言えよう。

次に無生の四諦に対する記述であるが、灌頂は

二無生四諦者。推苦集之本。本自不生。不生故則無苦集。既無所壞。亦無能壞。故稱無生四諦。論其相者。解苦無苦。而有眞諦。集道滅亦如是。如經。<sup>58</sup>

(二に無生の四諦とは、苦集の本を推するに本より生ぜず。不生の故に則ち苦集なくば既に所壞無く、亦た能壞無し。故に無生の四諦と稱す。其の相を論ざば苦は苦無くして而も眞諦有りと解す。集道滅も亦た是の如く經の如し。)

と述べて、元々苦や集の本は不生であるためこれらのものは無いとして、生滅の四諦の時に用いられていた能壞と所壞の関係も無いと説示している。

無生の四諦に関する智顛著作の記述であるが『四教義』を見ると

二明無生四諦者。如思益經云。知苦無生名苦聖諦。知集無和合相名集聖諦。以不二相觀名道聖諦。法本不生今即無滅。是名滅聖諦。即苦集滅道四法。名字事相是同而諦義有異。前以生滅之理爲諦。今明不生不滅真空之理爲諦。亦名四眞諦也。故涅槃經云。菩薩解苦無苦。是故無苦而有眞諦。解集無集。是故無集而有眞諦。有滅有眞有道有眞故名四眞諦也。<sup>59</sup>

(二に無生の四諦を明かさば、如思益經に云く、苦を知ること無生なるを苦聖諦と名づけ、集を知ることと和合相無しを集聖諦と名づけ、不二の相を以て觀ずるを道聖諦と名づけ、法は本より不生にして今は即ち滅無し、是を滅聖諦と名づく。即ち苦集滅道の四法の名字と事相は是れ同じくして而も諦の義に異なり有り。前の生滅の理を諦と爲すを、今は不生不滅真空の理を諦と爲す。亦た四

<sup>58</sup>『大正』 vol. 38, 9 a18-a22

<sup>59</sup>『大正』 vol. 46, 726 a5-a13

眞諦と名づくるなり。故に涅槃經に云く、菩薩は苦と無苦を是の故に苦無くして而も眞諦有りと解し、集と無集を是の故に集無くして而も眞諦有りと解す。有滅にして有眞、有道にして有眞の故に四眞諦と名づくるなり。）

とある。

この記述を見ると、生滅の四諦とは諦の概念が異なり、本文中には「不生不滅眞空の理を諦と爲す」とあって空の教理が根本となっている。

『涅槃經玄義』における無生の四諦は「苦集の本を推するに本より生ぜず。不生の故に則ち苦集なくば既に所壞無く、亦た能壞無し」と定義されており、『四教義』に説示される「不生不滅」の義と同等のものであるという言う事が可能である。

従って、表現方法は簡易ながらも『涅槃經玄義』における無生の四諦の定義は、生滅の四諦と同様に智顛の説示した内容を踏襲したと言えよう。

次に三番目に説示される無量の四諦についてであるが、灌頂は次のように述べている。

三無量四諦者。分別校計苦集滅道。有無量相。非諸聲聞緣覺所知。如經。<sup>60</sup>

（三に無量の四諦とは、苦集滅道を校計して無量の相有りと分別す。諸の聲聞、緣覺の知る所に非ず。經の如し。）

この部分について灌頂は、先の二つに比べると簡易的な表現に留め、「集滅道を校計して無量の相有りと分別す」という表現で無量の四諦を説示している。

無量の四諦に関する智顛の文献の記述であるが、『四教義』に

三明無量四聖諦者。如大涅槃經説。知諸陰苦名爲苦諦。分別諸陰有無量相悉是諸苦。是名無量苦諦。無量集滅道。至下自當具出經文。如是

<sup>60</sup>『大正』 vol. 38, 9 a22-a23

四諦之理。涅槃經云悉非聲聞緣覺所知。故知皆是別教所詮之理也。<sup>61</sup>  
 (三に無量の四聖諦を明かさば、大涅槃經に説くが如く、諸の陰苦を名づけて苦諦と爲すを知り、諸陰に無量の相有って悉く是れを諸苦と分別す。是れを無量の苦諦と名づく。無量の集滅道は下より至って當に具に經文を出だすべし。是の如き四諦の理は涅槃經に云く、悉く聲聞と緣覺の知る所に非ず。故に皆是れ別教所詮の理と知るなり。)

とある。

『四教義』では無量の四諦の本質を「諸の陰苦を名づけて苦諦と爲すを知り、諸陰に無量の相有って悉く是れを諸苦と分別す」とし、機根については『涅槃經』に基づいて「悉く聲聞と緣覺の知る所に非ず。」と説示している。

これらの表現は『涅槃經玄義』における無量の四諦の説示である「苦集滅道を校計して無量の相有りと分別す。諸の聲聞、緣覺の知る所に非ず。經の如し。」と同致のものと言える。

従って灌頂の説示した無量の四諦の概念は智顛の説示した概念を踏襲したものであるという事が出来よう。

次に四番目となる一實の四諦に対する記述であるが、灌頂は次のように述べている。

四一實四諦者。解苦無苦。而有於實。乃至解滅無滅。而有於實。實者。非苦非苦因。非苦盡。非苦對。而是一實。乃至滅亦如是名一實四諦。具如經。<sup>62</sup>

(四に一實の四諦とは、苦と無苦、而も實有りと解し、乃至滅と無滅は而も實有りと解す。實とは苦に非ず苦の因にも非ず。苦を盡くすに非ず、苦を對するに非ずして而も是れ一實なり。乃至滅も亦た是の如し。是れを一實の四諦と名づく。具には經の如し。)

<sup>61</sup>『大正』vo. 46, 726 a20-a25

<sup>62</sup>『大正』vol. 38, 9 a23-a27

灌頂は一實の四諦について、苦と無苦や滅と無滅といった相対する存在は無く、一つの實とされるものであると説示している。

一實の四諦に対する智顛の文献の記述であるが、『四教義』には

四明無作四諦者。如涅槃經明。約一實諦而辨四諦。即是無作四實。諦明四實不作四故名無作。觀四即得實故名四實諦也。涅槃經云。所言苦者爲無常相。是可斷相。是爲實諦如來之性。非苦非無常非可斷相。是故爲實。虛空佛性亦復如是。無作集滅道諦在下當具引涅槃經此文即無作四實諦之明説也。若能依經。解此四諦即一實諦。是爲圓教所詮之理。<sup>63</sup>

(四に無作の四諦を明かさば、涅槃經に明すが如く、一實諦に約せば而も四諦を辨ず。即ち是れ無作の四實なり。諦を明かさば、四實は不作の四なるが故に無作と名づく。四の觀は即ち實を得るが故に四實諦と名づくるなり。涅槃經に云く、言う所の苦とは無常の相を爲す。是れ斷ずべき相なり。是れを實諦如來の性と爲す。非苦、非無常は斷ずべき相に非ず、是の故に實と爲す。虚空の佛性も亦た復た是の如し。無作の集滅道諦は下に在って當に具に涅槃經の此の文を引くべし。即ち無作の四實諦の明説なり。若し能く經に依り此の四諦を解せば即ち一實諦、是れを圓教の所詮の理と爲すなり。)

とあり、『法華玄義』には

無作者。迷中輕故從理得名。以迷理故菩提是煩惱名集諦。涅槃是生死名苦諦。以能解故煩惱即菩提名道諦。生死即涅槃名滅諦。即事而中。無思無念無誰造作故名無作。<sup>64</sup>

(無作とは、中に迷うこと輕きが故に理従り名を得る。迷いを以て理とする故に菩提とし、是の煩惱を集諦と名づけ、涅槃はれ生死を苦諦と名づく。能く解するを以ての故に煩惱即菩提を道諦と名づけ、生死即涅槃を滅諦と名づく。即

<sup>63</sup>『大正』 vol. 46, 726 b5-b13

<sup>64</sup>『大正』 vol. 33, 701 a4-a8

ち事は而も中、無思、無念にして誰も造作すること無き故に無作と名づくるなり。)

とある。

『四教義』では無作の四諦の性質を「四實は不作の四なるが故に無作と名づく。」とし、『法華玄義』は「即ち事は而も中、無思、無念にして誰も造作すること無き故に無作と名づくるなり。」と述べて他より造作がないものとしている。

『涅槃經玄義』の記述は「實とは苦に非ず苦の因にも非ず。苦を盡くすに非ず、苦を對するに非ずして而も是れ一實なり。乃至滅も亦た是の如し。」とあって、外からの造作がないことを説示している。

以上の事から、無作の四諦に対する記述の本質的な部分は共通の概念であるため、文章表現こそ異なれど、灌頂は智顛の概念に倣って説示を行ったと考えることができよう。

灌頂はこのように四種の四諦の定義を説示し、さらに先の法身の徳の部分と同様に、二つの項目によってその関係性を述べて四種の四諦の項目を総括している。

その部分の始めの記述であるが

非離生滅四諦。別有一實四諦。即達生滅而是一實四諦。無生無量。亦復如是。一中有無量。無量中有一。不可思議。不可説示。<sup>65</sup>

(生滅の四諦を離れて別に一實の四諦が有るに非ず。即ち生滅に達して而も一實の四諦なり。無生無量も亦た復た是の如し。一の中に無量有って無量の中に一有り。思議すべからず、説示すべからず。)

とあり、灌頂は四種の四諦が一實（無作）の四諦に相即することを述べ、その本質性を不可思議として説示ができないとしている。

二つ目の部分の記述であるが、灌頂は

<sup>65</sup>『大正』 vol. 38, 9 a27-a29

強欲分別令易解故。總唱一實四諦。即是名也。取一滅諦。即是其體。故勝鬘云。一依者。即一滅諦也。道諦以當其宗。取道諦所治。以當其用。調御心喜。說此眞諦。即名爲教。雖差別說。只是一無差別法耳。<sup>66</sup>

(強いて分別し解し易からしめんと欲するが故に、總じて一實の四諦と唱うるは即ち是れ名なり。一滅諦を取るは即ち是れ其の體。故に勝鬘に云く、一依は即ち一滅諦なり。道諦を以て其の宗に當つ。道諦の所治を取るを以て其の用に當つ。調御の心喜び、此の眞諦を説くを即ち教と爲す。差別して説くと雖も、只だ是れ一の無差別法なるのみ。)

と述べて、四諦を五重玄義に当てはめてその性質を説くとともに、説かれる教は表面上が差別の法であっても本質は一つの無差別法であるとして、四種の四諦の説示を総括している。

#### 4) 不生不生について

次に四番目にあたる不生不生についてであるが、『涅槃經玄義』の體に対する記述の中では五つの特徴に数えられるものの、本文中では他の四つのように具体的な記述はなされていない。

灌頂撰で『涅槃經玄義』と関連する文献としては大乘『涅槃經』の注釈書である『大般涅槃經疏』がある。

そのため、不生不生については『大般涅槃經疏』の記述より不生不生の概念を窺う。

『大般涅槃經疏』における記述であるが

不生生是本無今有。生不生是本有今無。生生即是三世有法。不生不生即是無有是處。生不生是諸行無常。不生生是生滅法。生生即是生滅滅已。不生不生是寂滅爲樂。不生生是如來證涅槃。生不生是永斷於生死。生死即是生生。若能志心聽常得無量樂即是不生不生。<sup>67</sup>

<sup>66</sup>『大正』 vol. 38, 9 a29-b5

(不生生は是れ本無くとも今は有り。生不生は是れ本有りて今は無し。生生は即ち是れ三世有法。不生不生は即ち是れ無有是處。生不生は是れ諸行無常、不生生は是れ是生滅法、生生は即ち是れ生滅滅已、不生不生は是れ寂滅爲樂なり。不生生は是れ如來の涅槃を證し、生不生は是れ永く生死を斷じ、生死は即ち是れ生生なり。若し能く志に心に常を聽いて無量の樂を得るは即ち是れ不生不生なり。)

生不生是我説即是空。不生生是亦名爲假名。不生不生是亦名中道義云云。<sup>68</sup>

(生不生は是れ我即ち是れ空を説く。不生生は是れを亦た名づけて假名と爲す。不生不生は是れを亦た中道義と名づくと云云。)

初言不生生不可説。即非初難生定是常。生生不可説。非第二難生 定無常。生不生不可説。非其第三自生則失自性故是生不生。不生不生不可説。非其第四生他之難。前云若能生他何不生無漏。故言不生不生不可説。<sup>69</sup>

(初めに不生生不可説について言わば、即ち初めの生を定めて是れを常と難ずるに非ず。生生不可説は第二の生を定めて無常を難ずるに非ず。生不生不可説は其の第三は自生に非ず。則ち自性を失うが故に是れ生不生なり。不生不生不可説は其の第四の他を生ずる難に非ず。前に云く、能生の他に生ぜば何ぞ無漏を生ぜざる。故に不生不生不可説と言うなり。)

とある。

上に挙げた不生不生の定義を見ると、「即ち是れ、是の處に有ること無し」「不生不生は是れ寂滅爲樂なり」「不生不生は不可説なり」「不生不生は是れを亦た中道義と名づくる」とあるため、灌頂は不生不生に対する見解は先に挙げたような見解を持っていたと言える。

<sup>67</sup>『大正』 vol. 38, 157, a4-a9

<sup>68</sup>『大正』 vol. 38, 157, a14-a16

<sup>69</sup>『大正』 vol. 38, 157, b29-c5

不生不生に関する智顛の著作の記述であるが、『四教義』に

四次明用圓教。詮無作四實諦理。無作四實諦理。即是大涅槃經。明不生不生義。不生不生既不可説。<sup>70</sup>

（四に、次に圓教の用を明かさば無作の四實諦の理を詮ず。無作の四實諦の理は即ち是れ大涅槃經に不生不生の義を明かす。不生不生は既に不可説なり。）

とあり、この部分では不生不生の義が圓教の無作の四實諦と結び付けられている。

『大般涅槃經疏』では不生不生は中道義であると定義され、また不可説のものとしてされており、『四教義』には中道義が圓教の理であることと共に不可説の語もあることから、『大般涅槃經疏』と『四教義』の記述は一致すると言える。

また、『法華玄義』を見ると

佛界相性は亦名中道義。（中略）佛界相性は即ち寂滅爲樂。又生滅已寂滅爲樂。即是別教相性。即於生滅仍是寂滅不待滅已方稱爲樂。是爲圓教佛界相性云云。<sup>71</sup>

（佛界の相性を是れ亦た中道義と名づく。（中略）佛界相性は即ち是れ寂滅を樂と爲す。又、生滅は已に滅して寂滅を樂を爲すとは即ち是れ別教の相性なり。生滅に即し仍りて是れ寂滅なり。滅し已るを待たずして方に稱して樂と爲す。是を圓教の佛界の相性と爲すと云云。）

とある。

『法華玄義』では佛界の相性が中道義であると定義し、中でも圓教における佛界の相性は「即ち生滅に仍て是れを寂滅とするは、滅を待たずして已に稱してまさに樂と爲す」とされており、生滅と寂滅が相即した状態を

<sup>70</sup> 『大正』 vol. 46, 727 a8-a10

<sup>71</sup> 『大正』 vol. 33, 695, c19-c26

樂と述べている。

『大般涅槃經疏』では、不生不生は中道義であると説示されており、性質として寂滅爲樂もこの中で説かれている。

灌頂の説示する不生不生の概念のうち、中道義と不可説は智顛の説示した概念を踏襲したものという事が可能であるが、中道義と寂滅爲樂は『法華玄義』のみにある概念であるため、この部分に関しては灌頂独自のものである可能性があることを考えなければならないであろう。

### 5) 正性について

五種類のうちの最後にあたる正性についてであるが、本文中の記述は次のようにある。

五約正性者。性有五種。謂正性因性因因性果性果果性。正性者。非因非因因。非果非果果。是名正性。因性者。十二因縁。因因性者。十二因縁所生智慧。果性者。三藐三菩提。果果性者。大般涅槃。今且約一事論之。五陰下所以。即正因佛性。五陰即因性。觀五陰生智慧。是因因性。此智慧増成。是果性。智慧所滅。是果果性。於陰既然。餘一切法亦爾。<sup>72</sup>

(五に正性に約すとは、性に五種有り。謂く、正性、因性、因因性、果性、果果性なり。正性とは因に非ず因因にも非ずして果に非ず果果にも非ず。是れを正性と名づく。因性とは十二因縁、因因性とは十二因縁所生の智慧、果性とは三藐三菩提、果果性とは大般涅槃なり。今、且く一事に約して之を論ざば、五陰の下の所以は即ち正因佛性。五陰は即ち因性、五陰を觀じて智慧を生ずるは是れ因因性なり。此の智慧を増成するは是れ果性、智慧の滅する所は是れ果果性なり。陰も既に然り、餘の一切法も亦た爾り。)

灌頂は正性を五種類に分類し、正性を正因佛性としたうえでそれ以外の四つの性それぞれの性質と因果関係を説示している。

<sup>72</sup>『大正』 vol. 38, 9 b5-b13

この記述に係する智顛の著作の記述は『法華文句』の中に

佛性有五。正因佛性通亘本當。緣了佛性種子本有非適今也。果性果果性定當得之。<sup>73</sup>

（佛性に五有り。正因佛性は通じて本・當に亘り、緣了佛性は種子本有にして今に適まるに非ざるなり。果性と果果性は定んでまさにこれを得べし。）

とあって、五種佛性と三因佛性が組み合わされる形で説示されている。

また、先行研究において五性の概念について灌頂は三因佛性と組み合わせで理解しているとの指摘がすでになされていることから<sup>74</sup>、この部分は智顛の説示した概念を土台にしたものと考えることが出来よう。

五性は上のように述べられ、この項目の総括部分は先の項目と同様に二つの視点より述べられている。

一つ目の部分であるが

當知五性亦非條別。即一而五。即五而一。一而不混五。五而不離一。不可思議。不可説示。<sup>75</sup>

（當に知るべし、五性は亦た條が別に非ざることを。即ち一にして而も五、即ち五にして而も一なり。一にして而も五は混ざらず、五にして而も一と離れず。思議すべからず、説示すべからず。）

とあって、先の項目と同様に五性が相即性を持っていることを説示している。

二番目の項目は

強欲分別令易解故。指果果性爲名。指正性爲體。指因因性果性爲宗。指因性爲用。作此分別五性爲教。雖復分別。只是一法。更無差別。<sup>76</sup>

<sup>73</sup> 『大正』 vol. 34, 140 c9-c11

<sup>74</sup> 藤井（1987, 124）を参照のこと。

<sup>75</sup> 『大正』 vol. 38, 9 b13-b15

（強いて分別し解し易からしめんと欲するが故に、果果性を指して名と爲し、正性を指して體と爲し、因因性と果性を指して宗と爲し、因性を指して用と爲し、此の分別を作して五性を教と爲す。復た分別すと雖も只だ是れ一法にして更に差別無し。）

と述べて、灌頂はこの部分においても先の項目と同様に、それぞれの項目に五重玄義を当てはめており、さらに分別はあれども本質は一つであることを説示して、この章を結んでいる。

### 3. おわりに

以上、灌頂が説示する涅槃の體について『涅槃經玄義』の本文と智顛の著作の記述を対比させる形で内容を概観し、検討を行った。

體について言及されている部分は『四教義』『維摩經玄疏』といった智顛親撰の文献及び『法華玄義』『摩訶止観』などの智顛述・灌頂筆の文献と本文中に用いられた語句とその解釈はほぼ同じものであった。

しかし、わずかではあるが、智顛親撰の文献にはないが、智顛述・灌頂筆の文献のみにある語句の用法例や解釈が見出された。

灌頂は『涅槃經玄義』の本文の中で執筆の態度を

管窺智者義意輒爲解釋。<sup>77</sup>（智者の義意を管窺して輒ち解釋を爲す）

と述べており、師である智顛の解釈に可能な限り沿う形で『涅槃經玄義』を執筆していたと考えられる。

執筆態度や本論に於いて検討した内容からは、灌頂の言葉の通り體に対する灌頂の理解は大部分が智顛の著作に準ずる形のものであったと考えることは可能である。このことから、「體」について限定すれば灌頂の大乗『涅槃經』に対する理解は智顛の著作を土台としていると考えられるため、

<sup>76</sup>『大正』 vol. 38, 9 b15-b18

<sup>77</sup>『大正』 vol. 38, 14 c12-c15

大部分は智顛の考えに依ったと考えられる。

しかし、わずかな部分で灌頂自身の思想の混入や吉蔵の著作からの援用の指摘がある『法華玄義』等と同じ語句の用法や解釈が見られるため、その部分にだけ灌頂の独自性が存在している可能性が考えられるのである。

### 参考文献

- 『大正新脩大藏經』高楠順次郎・渡辺海旭主編、全 85 冊、大正新脩大藏經刊行会、1924~1934.
- 黄 瑜美 2005 「『大般涅槃經玄義』の縁起分をめぐる「日嚴争論」について」『印度學佛教學研究』53 (2): 685-687.
- 大野栄人 1975 「章安灌頂における「大般涅槃」釈考」『印度學佛教學研究』23 (1): 344-347.
- 河村孝照 「灌頂撰『涅槃經玄義』における「有る人」とは誰れを指すか」『印度學佛教學研究』34 (2): 218-225.
- 平井俊栄 1984 「法華玄義と法華玄論」『駒沢大学大学院仏教学研究會年報』42: 22-44.
- 藤井教公 1987 「涅槃經」における仏性の中国的理解——灌頂の「涅槃經疏」を中心として」『大倉山論集』21: 124
- 林 瑞蘭 2014 「章安灌頂と吉蔵の『涅槃經』解釈の比較について」『印度學佛教學研究』63 (1): 37-40.

## Summary

On the Concept of Essence 體 in Guanding's 灌  
頂 *Daban Niepan jing xuan yi* 大般涅槃經玄義

Taishō Yamamoto

Guanding 灌頂 (561 – 632) was Zhiyi's 智顓 (538–597) leading disciple and is known to have edited many of his master's works including the *Fahua xuan yi* 法華玄義 and the *Moke zhiguan* 摩訶止觀. The tendency is to view this as Guanding's major contribution, but we shouldn't forget that he also authored a few commentaries on the Mahayana *Mahāparinirvāṇasūtra* 涅槃經. The main ones are the *Daban Niepan jing xuan yi* 大般涅槃經玄義, in two scrolls 二卷, and the *Daban niepan jing shu* 大般涅槃經疏, in thirty-three scrolls 三十三卷. Previous research suggests that the *Fahua xuan yi* also incorporates some of Guanding's ideas as well as citations from Jizang's 吉藏 works. It is, therefore, legitimate to ask how much of the interpretations and doctrines set forth in the *Niepan jing xuan yi* represent Guanding's own contribution.

The *Niepan jing xuan yi* adopts as its interpretative framework the 'fivefold abstruse meaning' 五重玄義, i.e. name 名, essence 體, principle 宗, function 用, and teaching 教, a set of hermeneutical categories put forth by Zhiyi in the *Fahua xuan yi*. The 'name' and 'teaching' sections have been closely examined in earlier studies.

The present paper focuses on how Guanding treated the category of 'essence' in the *Niepan jing xuan yi* and investigates Guanding's understanding of the Mahayana *Mahāparinirvāṇasūtra* in relation to Zhiyi's works.

*Postgraduate Student,  
International College  
for Postgraduate Buddhist Studies*